

ブラジルといえば、何をイメージするだろうか。サッカーやサンバ、シュラスコを連想する人が多いだろう。地球の裏側に位置し、一見するとブラジルは遠い国のように思えるが、実際のところ、日本には数多くのブラジル人が住んでいる。出入国在留管理庁によると、在留外国人数は3,419,992人（2023年現在）で、そのうちブラジル人数は211,841人となっている。この数は、中国（821,838人）、ベトナム（565,026人）、韓国（410,156人）、フィリピン（322,046人）に次いで5番目に多いが、アジア以外の外国人数では最も多いのである。⁽¹⁾

他方、ブラジルには多くの日本人・日系人が居住しており、その歴史は明治時代にまで遡ることができる。1908年、日本人移民を乗せた第1回移民船「笠戸丸」が神戸港を出港してから、戦前に約189,000人、戦後に約68,000人の日本人が渡伯している。現在、日系人の数は150万人を超え、ブラジルは世界最大の日系人コミュニティを有している。また、ヨーロッパ（イタリア、ポルトガル、スペイン、ドイツなど）やアジア（中国と韓国）、中東（レバノンとシリア）からの移民とその子孫も住んでいるため、ブラジルには多様な人種、民族、宗教が混在している。こうしたブラジルの社会的文化的特性を踏まえ、筆者は「宗教」と「移民」をテーマに、知られざるブラジルの姿を解き明かしていきたい。

おやさと研究所におけるラテンアメリカ研究

まず、筆者が所属する天理大学おやさと研究所の設立理念とブラジル研究の意義について触れておきたい。

同研究所の前身は、昭和17年12月31日に設立された「天理教亜細亜文化研究所」であり、その第1回所員会議において、創設者の中山正善2代真柱は次のように述べている。

今になって研究所を設けたということは、如何にも時局に便乗して出来たように見えるが、この研究所のことについては、自分としては夙に語学校の設立に於いて考えを深うし、図書館の創設に於いて、その手を染めたものと思っている。即ち、図書館の中に「日本文化研究会」を設け、語学校の中に「海外事情調査会」を設けさせ、今日まで名称や組織は違って来たが、研究の必要を痛感し、その具現を計ってきたのは全く同じ気持ちからであった。更に教庁には「海外伝道部」を設け「史料集成部」を置いて来たことも、要はこの気持ちからであった。全てが本教伝道―世界救済に邁進すべき本教伝道上の必要に応じ、その処々に必要な機関の一つとして設けて来たものであって見れば、これ等の諸機関は決して個々別々のものではなく、本質的に一連の連関性を持ったものであった。⁽³⁾

これに応じて、研究所には第1部日本文化、第2部大陸（朝鮮、満州、中国、モンゴル、インドなど）、第3部大洋（フィリピン、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーランドなど）、第4部宗教（仏教、キリスト教、イスラム教など）の4部制が敷かれ、海外伝道に向けた調査・研究活動の土台が築かれた。その後、昭和21年に研究所の名称は「天理文化研究所」に改められたが、2代真柱の設立理念を踏襲して、「海外伝道調査班」や「海外伝道史編纂班」、「教義翻訳研究班」が編成された。当時の諸井慶徳所長は、研究所を「世界に於ける諸民族の宗教文化を研究し調査する機関」⁽⁴⁾と定義し、その存在意義を明確にするとともに、外国研究の重要性を説いた。

続いて、昭和24年に研究所は天理大学の附置施設として大学に編入され、名称も「天理大学宗教文化研究所」と改められた。その際、天理教部、宗教部、伝道部、民族部が新たに設置された。そして、昭和31年の教祖70年祭を契機に、研究所は今日の「おやさと研究所」に改称されて、ラテンアメリカの宗教や文化に関する調査・研究部門が追加された。昭和35年には、ブラジルの宗教事情に詳しい中田樞彦の入所を契機にラテンアメリカ研究が進み、平成10年と平成30年には「伝道参考シリーズ」として、『コロンビアの日々―1960年～1988年―』（太田哲三著）と『新宗教のブラジル伝道』（山田政信著）が発行された。筆者は、これらの書物を参照しつつ、ラテンアメリカで天理教の最大勢力を誇るブラジルの宗教事情を明らかにすることで、海外伝道を推進するための萌芽を、本連載で見出したい。

ブラジルの宗教事情

ブラジルにはどのような宗教が存在しているのだろうか。2010年のブラジル地理統計院の調査⁽⁵⁾によると、宗教別の人口割合は次の通りである。カトリック教徒が65%、プロテスタントが22%、無宗教が8%、スピリチュアリズムが2%、その他のキリスト教系教派も2%を占めており、カトリックが全体の過半数を占めている。また、ユダヤ教、ヒンドゥー教、イスラム教、仏教、日系新宗教（天理教、世界救世教、生長の家、パーフェクトリバティ教団、創価学会など）、アフロ・ブラジリアン宗教が残りの1%を占めており、ブラジルにはさまざまな宗教が混在しているのである。このような宗教の多様性こそが現在のブラジル社会を形作る重要な要素であり、その多様性を追求することでブラジルの文化や伝統、価値観をより深く理解できるようになるのである。

アメリカ南部人移民とプロテスタント

そうした観点から、本連載ではアメリカ南部人移民とプロテスタントに焦点を当て、ブラジルの宗教と移民について論じる。アメリカ南部人移民とは、米国の南北戦争の終結後、南部からブラジルへ移住した人々を指し、ブラジルでは「コンフェデラードス（Confederados）」と呼ばれている。この呼称は、英語の「南部連合支持者（Confederate）」のポルトガル語訳である。1865年から1870年にかけて、約4,000人の南部人がブラジルに渡り、農業植民活動に従事した。彼らはホスト社会で、南部産の綿花やジョージア州産のスイカ、クルミの栽培を普及させ、特にプロテスタント教会とアメリカンスクールの設立に貢献した。彼らの事例を糸口として、筆者は宗教を探究する意義について検討し、本連載が海外伝道を推進する一助となることを願っている。

[注]

- (1) 出入国在留管理庁「令和5年末現在における在留外国人数について」https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00040.html（2024年10月4日閲覧）。
- (2) 独立行政法人国際協力機構「ブラジルへの日本人移住」https://www.jica.go.jp/Resource/jomm/outline/ku57pq00000lx4thatt/list_01.pdf（2024年10月4日閲覧）。
- (3) 「亜細亜文化研究所第一回所員会議に於ける訓話」『管長様御訓話集（第3巻）』天理教教義及史料集成部、1944年、77頁。
- (4) 『おやさと研究所六十年誌』天理大学おやさと研究所、2004年、5頁。
- (5) Revista franco-brasileira de geografia, <https://journals.openedition.org/confins/7785>（2024年10月4日閲覧）。